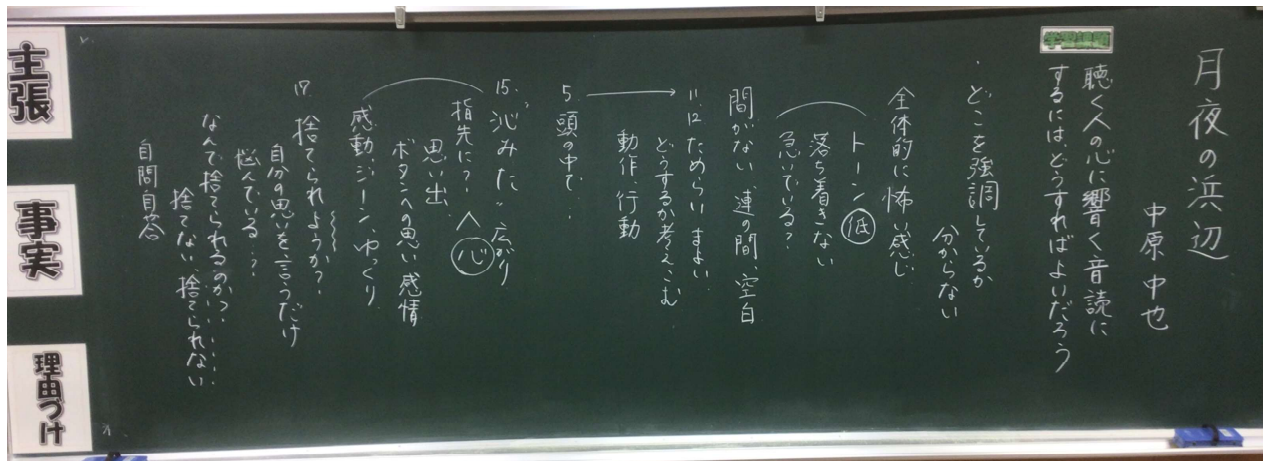


1 授業の実際

(1) 板書



(2) 生徒の学びの実際

①音読動画とともに提出した音読の工夫をまとめた文章から抜粋。

- 全体的に低くゆっくり読みました。「月夜の晩」という言葉がいくつかあり、誰もいないような夜に浜辺なので、暗く一人でしばらく過ごしたいような心情なのだろうと考えたからです。
- 内容にあった感情と声で読みました。「僕はそれを袂に入れた」は仕方なく入れる感じで、最後の「どうしてそれが捨てられようか」は疑問ではなく悩んでいる感じで読みました。
- 最後に、「なぜだかそれを」「月に向つて」「波に向つて」の後に「、」を入れて読みました。なぜなら、捨てたり抛ったりするのを躊躇うのに時間がかかっているのだと思ったからです。
- この詩には行が空いていたり、句点が付いていたりする部分があることに気付きました。それは、自分の考えや思い、情景、時の経過などが表されていると思い、読点よりも少し長く間を空けて読むことを意識しました。

②OPPシートのパフォーマンス課題自己評価の記述から抜粋。

- はじめと比べると成長しました。でも、他の人の音読を聞いてみると、自分と違う工夫をしているところがあって、「そっちの方がいいかも」と思ったところもありました。「詩に○○な思いを込めたい」と思いはしても、それを工夫を通して伝えるのが難しかったです。
- はじめに読んだ自分の声を聞くとAIよりも感情がないような読み方だったので驚きました。そこから「強弱がない」「間が短すぎる」という二つの課題について考え、何度も繰り返し読んでみました。自分なりに強弱記号を付けたり、間を入れるところを区切ったりして練習した結果、自分でも分かるくらい成長することができました。
- 詩を自分なりに解釈することが好きだったので、この言葉はどのようなことを指しているのかということは分かりました。しかし、音読のスキルが足りず、解釈したことをどのように読めばいいのか分かりませんでした。他の人の音読を聞いたり、自分の音読を聞いたりして、どのように読めばどのような雰囲気が出せるかが分かって、それを実践できました。
- はじめは、どこをどう工夫して読むか考えがまとまっていなくて、とりあえず詩の第一印象から声を落ち着かせて抑揚も全体的に抑える感じで読んでいました。しかし、終わりには、詩の情景を浮かべることができるようになって、文一つ一つを自分は思い描いた状況に合わせて読むことができたと思います。

3 成果(○)と課題(●)

- (1) 音読を中心とした学習活動は、生徒に詩の魅力に気付かせたり、詩の内容を深く解釈させたりすることに役立つ活動であったか。

- 韻文である詩には、音の調子やリズムを工夫したり、同じ言葉を繰り返したりして、声に出して読んだときに気付く魅力がある。音読活動を取り入れることによって、詩ならではの魅力に

気付かせる機会となった。

○内容解釈が難しい詩であっても、よりよい音読を目指して読み方を工夫するというアプローチによって、言葉を手がかりに内容解釈に取り組もうとする生徒が多かった。

●文学作品として詩の解釈が十分だったとはいえない。本単元は、あくまで音読という手段を中心に行ったが、もう少し精読に時間を掛けることで、音読の質にもつながったと考える。ただ、そうすると授業時数の確保も課題となる。

(2) AIの自動読み上げ機能を使ったICTの活用は学習の効果を上げる上で効果的であったか。

○学習者に違和感を持たせるために、AIの音声を授業者が作為的に調整したことで、読みを深める仕掛けを作ることができた。

○録音、動画の蓄積といったICTの便利さを活用して、生徒が自身の変容を振り返ったり、相互評価を円滑に行ったりできた。また、授業者も、蓄積された資料を基に生徒の学びを評価し、授業改善につなげることができた。

●AIの音読が良くないもので、人による音読が良いものであるということを前提とした授業になってしまった。今後、AIの普及やICTの更なる活用の流れを鑑みると、どちらにも善し悪しがあり、こういった場面でどの方法を用いるかを判断させるような姿勢をとるべきであった。